道中寒泉

甲 道中村の辻地蔵堂の前ふ
在る小泉へ 馬勧作ふ

七神祠 七神田ゟ其源ふ
流るし又七泉所ゟ
ゟ ゟ八幡一泉へ

七流ゟ七ツ村の七神田ゟ
小来井稲ゟ

秋風

真澄

甲 三嶋ノ神社

三嶋邑ニ在リ

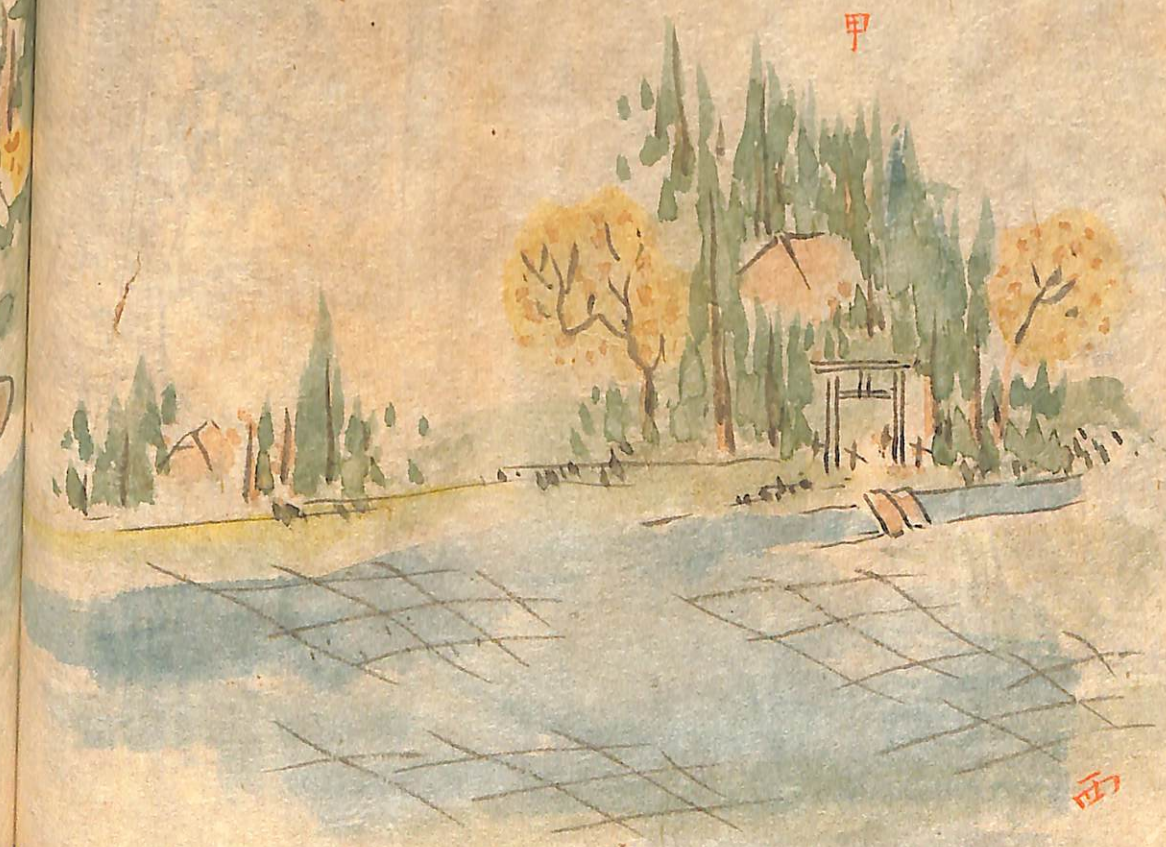
地主の氏神ニシテ
八幡大神宮 廣田ノ神
此三柱の神を會殿ニ
齋きまつる是
馬鞍石成醍醐
三村の鎮守の
御神ニ
義家将軍箭止の
樅まき武藏ノ落書セシ大槻
ノ三本ト在シルシ
枯ル其大槻ノ倒ル都ニ
震動雷鳴のごとくして
ふかし海ヲ土割ルヲ
迫きころその行ク四三ヲ
今八埋レ多シト云
その年ハ六月十九日のまぼろし
相撲ありそのまぼろしの
乙 桐の下道ありし

丁

丙 ここの中ハ立尺まの
碑ニ三ヶ所ニ此
社一千年ハ及シ
ものとそ
神門の前ノ
湟ヲ平藤川の
分水ノ

甲

甲安美陀ノ社
乙阿弥陀田ノ村
丙長者森の稲荷ノ社
齋主 森田氏ノ



東

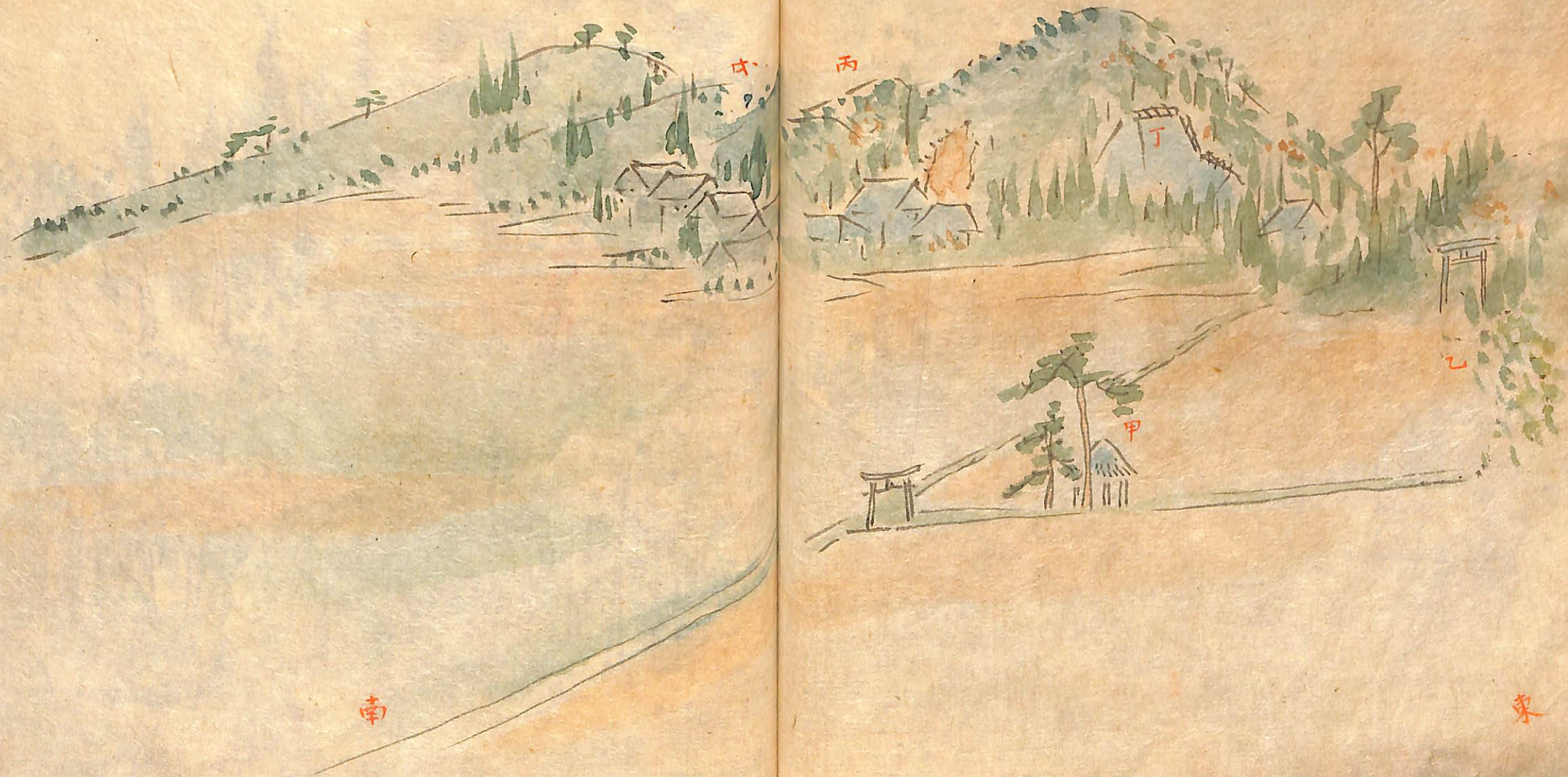
甲 トリカミヤマ 鳥冠山 鷲皮山 住人の名 ゆえ
此山の眺望
乙 梵舞 はこそ 馬鞍と
りはらいて
丙 明澤色
丁 明沢 嶽 金峯と云
戊 馬鞍のさへの神山
己 尾の沼
庚 柳清水 七流れの小へ
辛 さいうち村
今ハ せき合と云
壬 放山山 多ゐ 乾の山陰ふ
在り 小山
坤 虎 森 艮 ところ
癸 真人山
ひと 弓 ま
あ ま の
東
丁
戊
丙
北
乙
己
西
艮
坤
癸
辛
庚
甲
乾
柳

甲 舊田藥師ノ社七社ノ内

乙 坊山の神明宮近き
寛政のころ齋きまつる

丙 林寺村 丁 鷲峯山寶龍禪寺

戊 石田坂むかしハ家居あまた
あるし 家多や 石田坂ノ古門次郎
やうて 鉄砲の名人あるて
最上の寄手 第五郎
第三郎 是第てうち事
永慶軍記ニ見ゆ



第太郎明神　牙太郎
渕　戦功ありて討死
せしゆへとて後世ふ
其亡霊を神と
斎まつりむらし渕の
上ふ住ましとて
第太郎渕の石ゐ
南
永慶軍記馬倉
落城のくだりふ
西
東
北

館沼馬倉の
古城甲
佐々木能登守
信忠代々の
居城の跡乙
此山陰小空堀
の跡そハ
伊良子光弟
関口九助か
うちまし
舊跡

甲 馬倉ノ古城本ノ營今ハ
栗生（クリハヤシ）トカリ〳〵沙栗生〳〵

乙 杜邑

丙 三河ノ杜 三河村カシ
沙古城〳〵足直〳〵
〳〵〳〵〳〵

小野寺系圖ニ云小野寺
宮内大輔孫八郎時道の
嫡男馬倉能登守道當
次男樋口孫五郎道宇と
〳〵〳〵〳〵

孫重郎瀧

此瀧ハ浄山村の奥ふかく流れ落つる滝の上ふかくして
くらくふかくつまるしらべ滝の上ふかくして
雨乞せしといふ孫重郎ハ五月八日笹巻の餅にて採りて
町に賣りに行きしが此ころの笹かごなりしかば
昔ふ笹捕り六日ふ笹より採りにくらしかば
多くひょうして人くるしちまち笹ひしとて
まきとハ孫十郎の女子ハ百子と云ふ狂人なりしが笹の
切端をもいつくりつまるやう

○島鞍邑古城

甲金峯山の藏王宮関口能登守
齋きまつり乙本廓西家士村
栖居の跡之今ハ澤山村とゝ
丁外堀の跡を稲田成り
樂邑むゝ肆家之己
鉢森山とゝ

庚
杉原山のうゝ小亀井澤と
ゝ丸ゝて小亀すゝゑ石亀ハ
寒國ゝゝ まゝるすのゝすゝ
和名抄小蔡亀 本草ニ云ノ
蔡亀一名蟮蟮 蔡雜二音 和名ヤ之
加ヱ 陶隱居 註云
此ゝ山中ノ亀せゝ又ゝゝ

苔肉餅とゆうハ建治弘安のころ
永禄元亀天正のころわひまて
ゆゝ用ひ多くむし元槻の木にて
仗作と四ツ〆て弓の長さ延八九分
其さま蒲鉾ふ似るゝハ俗とハ
鐘ヶ弓とゆふ馬鞍城の迫見鎧陣見次し
とゆふ地ふ森田掃部とて雪力の者ハ
此者面色黑きゝて時の人泥ヶ沁と
醜号しいひしとゆふかの冥太郎ハ近
とゆふ伝ふ此ゆ冥太郎ハ
弓ゆゝむとゆ いゝる人ゆゝ森田掃部の
後胤善蔵とて田色ふあり郷し
ゝるゝとて はこゞまて一カ所ふ似ゝ

森田氏の迫と神後国の
浪人ゆゝ

森田善左門家蔵

本ト新藤田柳田ゆゝべけきて二村一郷ふ言詰あまハ田字
中ふ省ゆゝて いゝて秋田ノ郡ふ新藤田ゆゝまゝ柳田ハ多ゝ名
ゝ此色ゆ東ハ大谷ノ寺ゆ内西ハ下樋ハ南ハ外目此ハ妙け大
堤ふ中きゝて一村のゝゆ上ハ大屋澤の若神子の清水の流ゆて本
田伊ゝ新田ゆゝ小清水ゆて村ゆゝ泉の流て引きゝて作り反

新藤柳田村　里長　六左衛門　松之助　役假

神社

五大尊ノ社　新藤村ふ坐ゝ　祭日四月十日　齋主　保長
白山姫ノ社　柳田村ふ坐ゝ　祭日四月十六日　齋主　長吉
稲荷社　祭日八月十日　齋主　小作
田地字

寄御新藤柳田一

笹の崎　穴田　松の本　石田　猿田小屋

うら田　うしろやち　八郎小屋　禮塚村

享保郡邑記に云り新藤柳田村家負四十三軒　今四十戸　先年支

郷の猿田村名を唱ふべきに禮塚寶永七年本郷小引移

此邑廢て今は字名に殘まり柳田此邑も絶て字のみ殘り

新藤村家負古は八軒今七戸なり

絶家負四拾八戸　人數百八十七人　馬十一疋

外目村

此邑の東は橋澤（此村大屋の寺内村と存り）西は客殿薊谷地南は馬倉の

金屋邑此八新藤柳田村之

享保郡邑記に外野目村（野の字除カル）家負三拾軒　今十八戸　櫻澤

村田拾七軒　今十四戸　立白苅村田四軒なり此邑今廢村なり　金

屋村ともいふなり金屋は立郎兵衛といふ人の開発の地なりて今は

馬鞍村と屬せりと云ふ　外目中目某目某目は各邑

星長　作兵衛

神社

正觀世音村端の楢山の松枝の枝ふかくなる村の本居也

齋（イワヒ）まる　參日九月十八日別當大屋新町村鬼崎修驗西覺寺

辯財天女社　楢山の林番小祢（コネ）なりとして參り齋主作兵衛

神明宮　松杉ヶ村中の岡く祭日六月十六日

熊野社　小山ノ中ニ小西く向て在り　祭日　別當おとゝ村の五覚寺

田地山野字　別當並同し

山崎　五百苅　御麁澤　はくゝ沒　猿田　塚の腰

細腰　膳棚　三刈ゞき　大谷地　萩やち

家負三拾戸　人員二百人　馬二十疋

下樋口村

里長　伏藤理右衛門

此村東ハ中山を隔て大屋村西を容殿薊谷地村南ハ外目村

世ゝ上吉田村之字保部邑記ニ下樋口村家員廿四軒今廿六戸ありて内野

目村同三軒古舘有故村名ニ象ル此内野目今ハ村なし、新所村同廿軒

今ハ二戸先ハ辨財天堂有之故辨財天村ト云フ下樋口村肝煎孫惣野御

扶持忠進開仕ゲ年新処村ト改ト云　本堂村同拾軒今ハ三戸　三嶽權現堂

有ル故本堂村ト云フ　宿田村同六軒廢村　上吉田村内此村元和

元元和二両年下樋口村肝煎右馬之亟忠進開いゝメ附札馬之亟

開村上吉田地形之内ニ家三軒上吉田村支郷ニ分ル事ハ見えゝ今又

善福寺村ありて　山の字　廢畠の名　四百四十六ヶ所　汁ゝ

内野目　やしきが沒　桐ノ木沒　はちが沒　かぢ平き　岩の沒

明き通り（本堂への通路）　竹原　東長根　柳原之

神社

神明宮　新處村と善福寺村の間に坐す　此市社の祭日
四月十日　六月廿一日両度之
辨財天女の社　あり　堂と村に坐す　祭日三月十日　別當不動院
此邑の西南に大沼ありて百十拾石の水田の水上之
三嶽權現　本堂村に座り　齋主　仁兵衛

里長佐藤氏系譜

上祖と佐藤庄司信衡　第十三代　佐藤兵衛尉行信　長男
佐藤皐人正藤原義信　薙髪して一皈齋と号す　先祖代々

奥羽の間に住居する処　父行信の代に至り　羽州由利郡居館せしに
奥羽の英雄蜂の如く起りて百有餘年　兩国乱れて兵器休まず
いつしか就中田舎と辟地にして刺史定る事なく　或は山北に偏し
或は最上の為に切られ　累年塗炭に苦しむ　因て　應仁元年
丁亥　由利の民　相州鎌倉に到て　将軍足利義政公の相山内氏ノ藩
令太田持資に憑て　郡吏の無事と告訴を　将軍　許諾ありて
十二月の吏て任ず　大膳大夫大江義久　由利郡矢嶋に居城　笠原
大和守宣誉　仁賀保に住す　則二将をして　由利に部将多しむ
所謂　赤尾津子吉　苅田　越石　洋岩屋　浮保　鮎川　下村　玉米
等之　已上是て　由利十二堂と云つ　時に義信　部将　大江義久
に属して　矢嶋巌舟館に住して　矢嶋と　犄角の勢て　張る

二代信昌伊賀守　女子　矢嶋兵衛尉満愛室と為れ
三代信巨式部大輔　死年月閥　法名寂西
四代信景和泉守　幽閑齊　天正四年丙子四月廿八日の夜
仁賀保の城主小笠原明重矢嶋城を奪ひ城主大江五郎満安
の下知に因て小助川摂津守豊嶋右馬介金子尾張小番河内
同喜兵衛尉栄田三左衛門尉牧野修理亮金九郎刀大尾普
賢坊等と共に仁賀保攻を血戰して敵将明重を討て信
景其首級を得て其功を賞せられて直根百八氣庄夫に任
せらる天正十八年庚寅十二月二日没　謚　英哲禪定門
其男満信筑前守　瀧澤岩澤等謀叛の時若干の功あり
所領加恩せらる　其次安信越前守後に山北に来り平
康郡植田村に住す
五代道信廿貳因幡守　元と信通と号
天正十八年庚寅羽柴秀吉殿下の命に因て國主山形出羽守義
光撤して部将大江五郎満安を招るの時矢嶋留主として満安
一門典兵衛尉満祐（満安舎弟）矢嶋摂津守根井右兵衛尉三将を以て
封疆を守らしめ且佐藤越前守小番喜兵衛尉同掃部相
場市右衛門尉杉山加賀等を副て鑑為せり
嘗て信通父信景と共に城主満安に扈従して最上山形に入る
然るに留主典兵衛尉満祐密に討りて矢嶋を押領せしも
佐藤安信此密計を察して満安の舅小野寺肥前守茂
道（山北西馬音内城主）小書を送て茂道諾して羽書を最上に飛して

満安ゝ告ゞ満安辞去ふ内乱あゝ事を以てして郎最下を
発して領内笠根子小趣き猿倉平七が館入り矢嶋城返
て攻ゆを時小随遂の武士小番河内金子尾張矢嶋三右門
尉佐藤對馬同藤太木村兵四郎豊嶋右馬丞伊藤五郎兵衛
金子案部柴田修理真坂下総岳田三郎太郎池田左京大
毛普坊猿倉平七信景信道等ゝ笠根子杉本の勢加り
千三百人を以て矢嶋城を圍む佐藤安信城中小在て内
應して味方を以き入小因て十二月十八日終ふ矢嶋城陥り叛
将典兵衛尉を誅して矢嶋を恢復して咸ゝ軍中を労ふ
佐藤一家の勲功を賞して笠根子ノ荘を恩賜せられ
後年故有て山北小入り平庶ノ郡樋口孫五郎道周の客として

渠が館ノ二ノ郭小住して領主小野寺遠江守義道横手城主の麾
下ゝ加り天正中馬倉城返攻の時宏小最上勢を敗り馬
倉孫兵衛尉をして彼の城小復しむ慶長三年戊戌ノ十月
四日没 法名嵩山道基 男友信 出雲
子孫 伊達家小仕フ
六代 昭信 彌惣 隠居 因幡
慶長五年庚子小野寺氏罪有て石州ゝ放流領地悉り没収
せられ小因て宇行田小居住して平庶吉田荘副吏となり
て彼民戸を司る同七年寅年 御迂封の後今は野市
扶持方 御本國ゝゝ下向樋口住居して上遠野隠
岐守秀宗ゝ乞て本の如く奉仕せむ事を告訴せと

云へども許容なし　宗の吹挙に因て元和元年乙卯九月十
五日其首人助兵衛典物惣兵衛及孫惣蔵に市執政向右近
太丈宣政の市指紙を以て樋口吉田開墾の地を賜り其言
曰開き次第告訴すべく加恩に宛べき
上意の旨を述
後年連々開墾して百六拾石餘に及べり是を配當して昭
信采地七石餘嘗て小野寺家滅亡の後一旦に武業を廢ス
云共先祖多の由緒及び新田開墾の功に仍て下樋口村に
屋敷を賜ひ苗字帯刀居下陸地永恩免せられ向家に憑て
其恩を奉謝し宣政酒盃を賜ふ
妻柳崎但馬某女　万治元年戊戌九月八日没法名妙徳導師報恩山善福禅寺　正保二年乙酉

三月十三日没道号華窓法名道珊導師報恩山善福禅
寺に
七代信辰　利右ヱ門　和泉　父昭信隠居の後
向家に至り見参盃を賜ひ継襲の恩を奉謝す父の箕
裘を嗣て永く民戸の吏多し　妻姓氏闕　万治三年庚子十一月六日死法名妙
宿導師報恩山師　信辰寛文十三年癸丑九月十三日死諡秋傳道寸
師善福禅舎　某　太左ヱ門　分地別家す
八代信朗　利右ヱ門　父隠居の後向家に到り
見参の盃を賜ひ嗣襲の恩を奉謝す
妻姓名闕　万治三年庚子正月六日死法名妙雪導師善福寺
慶安二年己丑十二月十一日父に先而死法名道國導師善福寺
寄俗下樋口村六

信匡（ニテ）太兵衛　分地配當別家ス

當時　佐藤利兵衛　系別ニ在リ

十六代信豊　左太郎　利右ヱ門

實ハ平戸郡客殿薗谷地村ノ住分流佐藤仁右ヱ門廣信ノ男

信寛養テ家嗣ト実家上遠野監物屋敷地頭ヲ文化七年庚午三月父信寛

隠居後向家ニ到リ見参式ヲ賜フ　徑襲の恩奉謝ス先祖昭信申リ代々勤方相續ス

文政三年庚辰羽黒御支配替リ小図テ見参儀告訴ス　同

五年壬午四月廿日於横手御執政小瀬又七郎殿ニ見参　執政羽黒

組頭伊藤助左ヱ門　日年郡方ヨリ苗字帯刀居下恩免の儀疑ヒ仰リ

著ヒ事蹟上載ヲ乞ヒの旨命セラル茲ニ図テ上遠野監物

秀積小憑テ其槩ヲ記載及懇情の扱図テ令可ヒ同六

年癸未二月郡御奉行黒澤監物傳達ヒテ舊来の儀ヲ

是ヒ苗字帯刀永ヒ恩免ヲ乞ヒ旨彰ハ御書ヲ賜フ

旦郡方吟味方喜兵衛執達の書ハ居屋敷陰地恩免等

の儀共ハ末孫紛乱ヲ乞ヒ趣ヲ令ヒ同年三月久府

ハ到ヒ同月六日於　御政務所月番　御執政梅洋典友衛

門殿ヘ目見恩ヲ奉謝ヲ時ハ執政列席　執政美副役小貫九兵衛

同月九日向右近殿ヘ見参

旦旧例の如リ表門ヲ建

女子名ハ波留　文化三年丙寅ハ生　信睦文化七年生

某三助　文化十二年生　女子名　美武　文政四年生

妻同氏太兵衛廣信ノ女

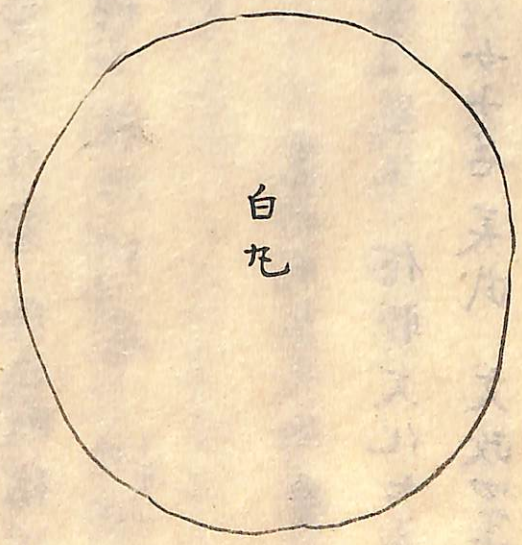
家紋地車

替紋

三頭左巴

紺地

旗印



右

佐藤理右ヱ門藤原信豊家藏書

市判紙のうつし

佐藤理右ヱ門家藏

樋口村右田村ヶ田を新開仕候
おんなを右田村ヶ田を写ス成
あとを右田ヶ田ヶ田を改ル
加賀ヶ国ヶ国ヶ
沸意ヶ所ヶ所ヶ
元和元年　九月十日

向右近

羽黒山金剛
法　助兵衛
日　与惣兵衛
行貴　孫三

佐藤利右門信豊聞き書ふ上祖佐藤孫想の代ゑ大肝煎どて節
寺遠江守義道の時世ゑ吉田櫃口の保長ゑ師辻村の後
元和二辰年三吉田上下櫃口ゑ立村ゑ分れつれど立村の此里長役て
かゑふゑ村ゑ常陸国羽黒町ゑふ処ふ九十人の足軽組ありゑ慶長七
年　御遷封の時御供ゑて十三人此秋黒書ゑおゑて後都ゑ十年ゑふ
かまゑ七十九人ゑ足軽おわゑ海て暮ひまゑて端ゑ来れどそれゑ佐竹公のゑ
あるでまゑ横ゑ山内入りて樵夫炭焼の業ゑして日ゑ送りぬかゑてあゑて
十九年ゑ大坂市陣ぶれありて世の中ゑゑちて此ゑき一君の佐供ゑて八人ゑ
坂の市陣出ゑ出ぬかゑて後此市陣の佐供せ八人ゑ常陸ゑ佐供せ十三人ゑ合
せて二十一人ゑ切ゑのどて寛永年中家士めゑゑゑゑ孫ゑつゑ人ゑゑハ
佐藤治想ゑ憑ゑて新田の開墾ふかゑて上下櫃口三吉田ゑて三百石

貸ゑの水田ゑ永きつれど貸ゑけれバ是ゑ永ふ售ゑて孫ゑ
地の田百六十石ありゑ新田小正保四年のあゑ検地佐竹入りわゑて野古扶持方
ゑて新ゑまゑ人ぬかゑて野古扶持の者三拾人此下櫃口村のこゑゑこふ家
居ゑて住ゑゑゑ横ゑ振家町の西茶庫の番作ゑゑて家ゑ中ゑ二人
つゑ三十日交代ゑてつゑあけれど道のかどゑ陽ゑゑづゑハけれバ延寶三年
小願ゑ達ゑやゑゑ諸ゑまゑバ有ゑゑゑ立年ゑゑ八年小及びてゑふ横ゑに引き
ゑつゑ経緯ゑゑふ地小栖居ゑまゑけれバ今ゑおゑて野古扶持町ゑふいゑて其ハ野
古扶持人三十人ゑ住ゑ海ゑ新屋の人ゑゑふ住ゑまゑ樵偏山の禁迫ゑハ
田ゑありゑて何ゑ有ゑ其ハ人の野古扶持ゑ来ふ文化三年ゑ鉄色ゑゑゑて
野古扶持古ゑ軽ゑ呼び出ハ人の外ハ一人家士ゑゑゑゑハ市免町小家居
孫ゑ九人ゑ世ふ住ゑ引び土民ゑゑハ町人ゑゑゑふゑふゑのゑぶゑ

また此あらとこ村むらハ辯財天村といひて古き弁天の霊像ありしが
ふる持かくちて殊ハ樹らしの池ゆゑ伽藍はいとこぶれて堂宇
枝特方再興ゆゑ又佐爰豊三ゆ功ゆれバ村の名ハ新延と改めまゆ弁財天の神
形をしゆゆしく人の古作などそいとむくの中ゆ経てかくちうけひゆ又一寸
八分の紫祠の霊遮那佛ゆこを弁天の別堂不動院の上祖二世福王院梅栄の親
ゆとの常陸の國ゆ持来り佛之其開祖をしゆる人なゆ才てあるゆゑ
ゆて死ゆるけんバその名をの迂化のゆゆ月ゆつはゆふハ新ゆゆとハ
また信豊が四代目の信景が住ゆとハゆ宇ゆ田ゆハゆゆ名をや右
京田なとと誤ゆ付ふゆめ此信景樋口陸立郎道周の客ゆて
二廊ふ存ゆ事なと佐爰氏の家系譜ふ法はゆゆ

不動院修験者

不動院皇祖を慶長十年のころ常陸國水戸ゆ此出羽ノ
國子康ノ郡ふ来ル実名迂化の年月不知　二世福王院梅栄寛
七年己未六月三日迂化　三世不動院儀永寶永大年己巳三月二日迂化　四世福王院法壽
迂化年月不知　五世不動院儀光寶暦六年丙子正月十五日迂化　六世神照坊法妙
安永元年壬辰七月十一日化　神照坊迂化ノ後二十餘年歴代中絶セ
七世當時現住不動院永諦也
横手野御扶持方ノ齋神辯財天ノ別當ふゆて三月十七日祭
祀料少ゆて野法扶持高の内二石ノ寄附あゆ
延寶五年市検地ノ時ゆ六畝廿八歩延市除地と成ゆ
少ゆ此院の記禄ノ見えゆ

明泉寺

熊王山明泉寺八東本願寺ノ直末寺ノ此寺開基ハ俗姓皇都の人ニして高畠助郎藤原宣行ト北面ノ武士タリしが
ゆゑありて浮浪の身となり高祖親鸞聖人の御真筆の
阿弥陀佛の画像を笈の内ニ安置し専修念佛をぎやうし
て祖師の御舊跡を順拜のため関東ヘ下向し陸奥ノ國南部
和賀ノ郡笹間村の高橋某が家ニ立ちよりて氏を高橋ト改
めてもはらこの笹間村ニ住ぬやがて発心出家して誓超坊ト
号し其後天文の年此出羽ノ國ニ来て平庫ノ郡横手の山崎
ト云ふ地ニ佛刹一宇を造立し此山崎ヲ天文十二年癸卯
四月十五日ニ寂り　二世浄西坊　元亀三年壬申ノ三月
七日迄化　其世ヲ小野寺家横手ニ在城のころ引て役人
囚人を引て門前を通りけるバ浄西坊是を見て罪
人を救ひ得ん事を願ひ佛衣の袖をやられの頭ニ覆ひ
かくびつて道を遮りて妨げしバ役人ども罵詈
をなして怒て山崎を追ひ拂ふ寺をこぼちて大谷寺内村のあるる
熊野堂と云ふ処ニ引退きて住ぬ　三世浄玄坊　文禄三年甲午
正月十日化　四世超信坊　元和六年庚申十月二日化　五世専
通坊　寛永十一年甲戌五月三日化　此五世専通坊の時代寛永
元甲子大谷寺内村の熊澤邑ヘ遍口村の本道ト云ふ処ニ寺を
移して住ぬ今の明泉寺ニ移る　寛永二年乙丑西本願寺
第十三世の御門主良如上人ヘ弥陀の画像の大幡の一軸を賜り

即良如上人の御裡書御真筆と見明泉寺の宝寶と
寛永七庚午霜月八日良如上人より寺号を明泉寺と付賜
その證拠今あるあり　六世経念延寶八年庚申六月十日
化　七世淨寿正德三年丙戌八月十五日化　延寶四年丙
辰三月東本願寺小帰参ス故参神妙小思しめるしその御
褒美として木像の本尊ひらく佛を賜り又延寶四年丙
辰五月蓮如上人の御影御免あり御裏書きと常如上人の
御真跡唯今安置せり　延寶五年丁巳二月十五日木佛本
尊頂戴ス御裡と常如上人御真筆並御添簡共ス家藏ス
此本尊八本山の御寶藏と取り在り行基僧正の作佛なり今本堂
小安置しなるく　八世淨心享保二年丁酉六月六日化此代ハ
享保元年丙申十月聖德太子御影並三國七祖御影御
免ス此裡書八真如上人御真筆並御宗司中御添簡
共小家藏ス　九世教信安永七年九月廿七日化　十世教
圓寛延三年十月三日化　十一世知傳安永六年七月廿八
日化　十二世現住教惠代之

善福寺　曹洞宗

報恩山善福寺八相模國小田原ノ海藏寺を本山とし海
藏寺の二世　天室正運和尚と善福寺の皇祖ニて長享
三年己酉七月三十日迁化　二世節嵒圓符和尚三月七日化　三
世張山宗陽和尚三月九日化　四世和悦宗閤和尚二月廿日化
五世偏畏禅周和尚八月十六日化　六世證契祖印和尚九月廿一

日化　七世盛翁栄茂和尚三月晦日化　八世樹下禅林和尚
二世〻〻八世まで迂化ノ年号不知〻〻
九世山領室　慶長十六年三月廿六日化　十世盛岩　元和三年三月廿八日化　十一世玉翁
元禄四年二月九日化　十二世國翁　寛文五年六月廿八日化　十三世揚山　元禄九年二月廿七日化
十四世大圓　元禄十三年三月四日化　十五世大岫　寶永三年三月六日化　十六世鳳山
寶永三年四月三日化　十七世雪峰　寶暦二年七月三日化　十八世兒林　寛保三年六月三日化
十九世雄山　安永四年九月十二日化　二十世常山　寛政七年正月十五日化　廿一世閑居
無染存生　廿二世當住東庵〻

下樋口村

家員五拾六戸　人二百三拾人　馬廿四疋

東

樋口ノ古城

樋口播立郎道周ノ居城ニ

甲 木廓 乙 二ノ廓

丙 樋ノ口邑

下樋口ノ

丁 あくいとこ邑

小野寺家系譜ニハ
泳立郎道寸と云ノ
此事ヲ母勇金の
古柵のくるふいて

北

下樋口村
甲あ〜とこの
辨財天乙
丙大屋堰丁
弁天沼
戊中嶋の神明宮
己宿田今廣村〜
甲
乙
丙
丁
戊
己

甲

雄賊天の池として
永禄元亀天正の
ころまでもいり
きやかまりき
水沼なりてあるしと
新田墾のころ
元和年中加藤
さ水氏坡百九間
あまり花ゆきぬ
此池の蓮茎の大さハ
三四人まりといて
遠江国櫻が池又
蓮華を九尺あるハ
二丈伸るハいつ
れも底して
茎もまた大きす
るべし天竺の祇園
精舎の伸池なる
蓮茎の豆九尺
なりと清村氏の
書けら評海ゑえら
二月十七日
弁天の神事修して
同十八日ハ沼茎の

其沼茎の日ハ
初婚まきあるふ
家作りしまき
こと処々此花ふ
ちらて住つきる
人ゑ丁梵天て大ぬさて
すてさばるを添きあふ
さしぬ

丙中沼の神明宮
本ちゑふるあうる
己古城山二郭
庚本九辛
あるとを色の
ゑゑゑ

甲 保呂羽山嶽
乙 田理、高藥師
丙 日部蘿生山
丁 西鳥海峯
戊 叡が岬
己 上吉田、寺
庚 中吉田弁天
辛 十五野の宮一村明神
壬 深間内
癸 客殿薊谷地
乾 宇行田長者中き
坤 下樋口あくとこ
艮 旗吹長根
巽
坤
乾
癸
壬
己
庚
辛
艮
幡吹長嶺ノ眺望
はたぶくとをの見さきふり
幡吹旗福畠福如
作ていと多くる地名之
此はたふくおうぶい
主城の尾上ゆる事之
大天堂ごぐち はたふくわ形法の
さとはたぶ紫美き家紋

樋ノ口ノ古城山ヨリ眺望

甲 三嶽ノ神山寅正中

乙 南部ノ釜臥ノ嶽丑寅中間

丙 本道村ノ御嶽山子丑間

丁 見詰嶽ハ古城ヲ見詰ル寄ろ

戊 古城ノ本廓

己 古城ニノ廓

庚 櫻澤邑

辛 大屋邑

あるところの〳〵
竹原寒泉ハ 甲 薬天山の北の方 乙 渓に在る
小清水にして岩の窪の三郎左衛門清水ハ
幅四山の西に在り。○典助清水ハ三ヶ〳〵
ゆづるの山の杉むらの中の小清水
其外本道村の方 大石清水ハ みこし〳〵の嶽の
南の方。大石窪といふる処に在り。
外目村のさく〳〵ひづまき 菊谷地邑の
観音清水にして七間に三間の大泉也
上植田の萩の芽清水 上吉田の野田清水
まき 新藤柳田。深川内の諸村
名所清水いろ〳〵多し

深間内村　里長　治右衛門

他國小福金邑　福金打邑　郡邑記小深
間内家員拾四軒　今十七戸　枝郷　高口村　古ハ七軒今六戸ありしなり

神社

神明宮　板子ヶ処に在り

祭日四月十日　別當中吉田郷藤根吉祥寺

正一位稲荷大明神　同処に在り

祭日八月九日　別當同修験寺

字所

羽根澤　日影舘

家員廿三戸　人員百四人　馬員四疋

あり記録に云黒沢甚兵衛道京八柏家より養子入
是より九代目慶長年中當依竹家小住ふ今東根小屋町
人家ふ上振子屋小在り馬澤伊兵衛道興と其後胤之本ト仙北
郡の仙矢村より三百石上境村かて三拝五合深間内村ふく
七拝五合と見えたり此深間内の事也

上吉田村　室長　庄左衛門

此辛庶ノ郡ふ吉田と云ふ慶上中下と三箇村あり中下の吉田
と浅舞村ふ属り上吉田と此醍醐を首郷と云郡邑記に云り
上吉田村総名唱ヘ　野田家数廿一軒吉田と可唱ヘ　見えたる家今と十六戸ノ
野田村十六戸　三ッ屋村家拾軒　今二　田野上ヘ同拾軒　今十七
新城村　ニシジヤウと唱ヘ　同二軒　御公地村此邑下境の属村清水町と入合の地ヘ
福田村同二軒　中吉田入合ノ地ヘ　四ッ屋村同拾軒　間前村四軒　朴田
村同十七軒　今拾五戸　高野村同七軒　今五戸　福嶋村同七軒　今五戸ヘ
竹原村家六戸此邑郡邑記小洩ル　野中家三軒　茅や
ノき家二軒　五拾田ノ同三軒　田中村同四軒　郡邑小見えたり
享保の末つくるや此四村廃邑多ク

神社

熊野宮　朴田の地小字　条日三月十七日　花のゝきゝを
もとりて　条日　齋主星長奉幣藤振村　吉祥寺
神明宮　条日四月十六日　齋主奉幣並に同し

中谷地　角掛ケ　鬼頭　田中　野中　五十田
字地
つゞき

古城跡西法寺の通り田野上へとふ処か在れハ村民西法寺
館とふ天正文禄の頃を吉田孫市郎陣道居城家二永
慶軍記四三巻か慶長五年大森合戦事をふくゝふ清
水大蔵義之十月十三日か酒田てうちたち同十六日大澤かて

著ふけゝ此事由利の人ゝ早打をゝて秋田か告しらハ城之助宗李
の陣代として湊二郎五郎同久五郎同典膳百騎を率し加勢
として大澤か馳著ける由利党か仁加保兵庫頭編子藏人瀧澤
形部ナ輔同又五郎ゝ大森勢十隊人討ふて既か町構ヲ乱入ル康
道此田ゝ入ゝ安ゝ思ゝ城中ゝ思の外無勢ゝて今日町構
を切破らるゝて鳥の雲ゝて慈し泉奥の水ゝ求ゝ折ふ
合弟吉田孫一郎陣道か郎等百騎人を引率し大森の北の河
の瀬を渡りて釵か宮ゝ歴廻ゝ城中か入ゝ来れハ同合弟義道か
等か岩崎伊豆前郷内記落合左馬丈大筭地又二郎庄司勝二郎
日野小左衛門三百騎人ゝて大森か忍び入ハ城中是ふ力ゝ為ゝ持
ふ人数ゝ増し翌日の合戦ゝ待ふけゝ夫ゝ山北吉田合戦ふ

くるふ四五百清水大蔵大輔義之田刑部の人ふ合戦の異見と何ら
其評定區区かしてさごまらん家ふ六郷兵庫少輔ご郎等大曲越中
行屋門目五郎等主の六郷ハ関ヶ原と参陣して留守居として六郷
ふ止りけるが最上殿より山北攻めの人数打入らと聞て領内の士民まで
去催して千五百人加勢と称し馳せ着しが清水殿の臣木戸周防を以て
申宣べけるハ此城ハ地の利全き山城ふ候へバ如何ふ寄手大勢ありも
一日二日ふ落城仕べきとも存候ハバ其上ふ横手吉田より加勢
打入り候而馬音内より武士頭二人ふ長柄鉄砲を軽夜叉鬼
山の方より城中ふ入を候ら風聞信厚バ此城をバ今の御人の内
一方を以て巻き為まひて弥人数を以て吉田を攻き候バ
是ハ平城の事なれハ一日の中ふ落城仕らべしと申けら
清水是をけてげふや六郷の者ども此迫近き事なれハ東内
郷むきバ是等を先手ふ加へ吉田を攻落さんと大森の城
を攻て開き延澤遠江守光信を大将として秋田由利六郷
は勢を合て三千除人五段ふ備へ押寄らされば吉田孫一郎
陣道処ふ小用河を置て敵陣を伺へバ早此事を知て合兄
横手ふ早打を以て これを告け黒川城ふ告知せ我方ふ般
若寺六郎次佐藤主水境喜助八幡ヤハタ三郎河崎主税を始め七百
除人寄来て敵の道を遮り境ふ出て陣を備ふ次ら西野孫三
郎此由けらと其ま取物も取ふて黒川を立て五百人ふて馳着
けら同時ふ横手の旗本遠田信濃久米伯内法答助五郎屋田
新左衛門石山右馬亟佐藤助兵田隼人佐是三十七騎ふ雑人

五六百人境ひで馳著けり先手里見神後守五百人ハ向て一番ハ
軍を始め遣つ啓つ詳合に最上の二見彩岡播守五百人横
を入まんと深田を歩むを処ハ山北方黒川勢皆既立て成て実て
かゝる後両陣乱合て五六度まで去徘む討死手負雙方同じ
斯る所ハ横手旗本戸波平右衛門と六郎滝無藤鑓を合せ
しが戸波鑓を抛てかへらぬを引組て六郎を取て押へ首を取
て退けば豊巻勝奮つ遁さじと追かゝる吉田郎兵衛般
若寺六郎次横手はふむぬと組む豊巻手を出て般若寺
を片手小脇に押即せ二刀刺徹し首搔落し立上る吉田が
郎兵衛境喜助大長刀かゝつけ打ハきを豊巻太刀を打落
され深手負て倒れ為る喜助首を取んとおりしを豊巻が下人

七八人刀を以て防ぎし故首をバ取ずに引ハけり喜助が下人に隨
分戦ひて打落しを豊巻太刀をバ取りおけを其外最上方ハ
て名ある者ども六七騎まで打死を豊巻ハ帰陣して其日のハ
で死ハける横手旗本ハ宮原左門四郎を引き付の首二ッまで
討捕バ同宇佐美見源助ハ歓七人ハ手負せ為る最上勢三千騎
を山北勢千五百と二時計り戦ひしが雙方戦ひ疲れて引ハけ
しを為る山北勢ハ吉田横手黒川の三度ハ敗けるとえ
西法寺
吉祥山西法寺禅林本山ハ雄勝郡三梨村寶福山桂
薗寺此寺むかし仙北郡飯詰邑小在りしが今ハ陣道城蹟
小遷て飯詰邑小西法寺本林寺古城跡ハ如き処ハ在り

寺人その寺所の上ふハ千部塚ありて人あり毒をもて登(ノボ)ればこれを殺の蛇の出
来(シタ)れバ人かこれをのがれ出(イデ)ず西法寺開祖を前総持本寺三世當寺
開山ゝ仁室梵龍和尚應永二年乙丑七月廿九日遷化　二世昌室
本純和尚晋山移轉並迁化年月を知らず三日不寂と定む　三
世無轉衣龍室周泉和尚迁化ノ年月不知七日不寂と定む　四
世音室永觀和尚兼應元年壬辰十二月十日化　五世唯心泰
圓和尚元禄十二年己卯十二月廿一日化　六世安山楚宅和尚
享保十年乙巳正月廿九日化　七世曦山宅陽和尚迁化年月
不知十五日不寂と定ム　八世寶山白瑞和尚明和二年乙酉十二月
廿五日化　九世桂龍呑文和尚天明四年甲辰五月廿二日化　十世
仙巖石叟和尚天明七年丁未六月二日化　十一世千丈石門和尚文
化十二年乙亥八月八日化　十二世泰山玉秀和尚文政五年壬午
閏正月十八日化　十三世末無轉衣現住宗岳宗鳳代ノ文政五
年壬午四月廿二日當寺ニ晋山ス
當寺檀越ノ家員　二百五拾戸ス

熊野社　吉祥山西法寺鎮守ノ主ノ御神ニ(城主
孫市郎陣道)の齋(イワヒ)まつる御神の今ハ寺の鎮守となりけるとぞ

客殿薊谷地村　里長　九郎左衛門

此客殿ハいつの名やもしらず寺院なりしゆゑなれ共
らんの薊谷地と薊谷ハ薊谷地ハ云ひ始し名なれ中古のころまで
薊谷地小仏ハ是二村一郷ハ唱ふ村名之享保日記ハ家負六軒と
又ハ今ハ二十戸と家栄え及あるゆゑ村名ハ客殿薊谷地河食
郡邑記ハ此村を川食と記ハ此二村を一郷とせり田井の水上ハ上樋口の松籠清
水の流の末ハ下樋ハ伊及村の東ハ下樋ハ西ハ中吉田南ハ上樋ハ北ハ上
吉田村之郡邑記ハ河食村家負立軒と又ハ今ハ四戸であるけり

神社

薬師如来社河食村ハ祭日四月八日齋主伏ニ藤仁左エ門
此地ハ食光山薬王寺と坂上大宿祢田村麿の草創かして大銅二年

の棟札有りしてこれ仏像今元禄二年九月八日と記したる棟札なり此事
記したる薬師は霊佛かして良工の佛師作なり迴禄せしとき右手の折
れたる今一世の佛師いしくびを作りて此なの附て全くもとのごとくなりぬ
事よりてさりければ行ほやくしにてぞおはしける佛形長二尺三寸汁
是獅子塚の梨木周囲五尺除の字木なり獅子頭足
塚といへるは獅子の事なりて頂る獅子なり勝る獅子
地ふ住して塚として重る小在り其村は獅子窪の入り来ぬさめしと
いへり　稲荷明神社　客殿村ふ在り　齋主　長右衛門
観世音菩薩ノ社　蓮谷地村ふ在り　祭日九月七日　齋主　久三郎
字所　備前国正保四年のころ　柳下　百目木下　[illegible]
村の家負二十戸　人員百人　馬員拾疋

上樋口村　里長　亦吉　八太郎　（保）

此邑東ハ外目村西ハ滝舞村南ハ醍醐村北ハ客殿村ふ中り
古城の跡あり樋口館なりそハ小野寺高道の三男藤原道守
の居城なり後ふ佐藤忠任是しふ居り二ノ柵て松舘なりふ物語ふ
そこ多し越後國柳崎城主左馬之光郷なりふ武士此出羽国子孫
郡ふ来て小野寺家ふ属りかなりて此家ふ柵居なりいりし近き世まで
松舘なりて村名ふ呼びしふ正保四年のころなりハ其村ハ廃なりて今ハ田畠の
字なりなり享保郡邑記小上樋口村家負拾三軒支郷　田野尻村同　六軒
沖田村同　五軒　石塔村同　拾四軒　今家　滝沢街道ふ石ノ塔なり
処なり故ふ名なり　藤島村同　五軒　今ニ　秋目村拾三戸あり　此村郡邑記
なりと見えなり　樋口は上下も並て古代変なりなりハ今云ひ作なり

神社

神明宮　萩の目ゝと地ゝ祭　祭日四月十六日

別當中吉田村藤振ノ吉祥寺

松舘稲荷大明神　古舘の跡ゝ祭り　祭日七月廿日

別當藤振修験並ニ同し

石塔稲荷大明神　むゝ石塔あゝ野ゝ在り　祭日四月九日

別當　並同

上宮太子ノ社　萩の目ゝ齋ゝ　祭日八月十七日

齋主ゝ名ざき義右衛門

此柳崎ノ齋ゝ厩戸皇子の神形在ゝ田来ていゝ申ゝ

記ゝ一ト巻ゝ中ゝ諸ゝ行ゝ

ゝ舒明天皇の市代ゝ侵優婆塞黄金

峯ゝ荘厳院と開創て行ひ給ひゝ陸

奥出羽ノ按察使陸奥守勤二寺坂上大宿祢田村麿再興あゝて上

宮太子の霊像を安置給ひゝ事に成ゝ行てゝ世を治て

暇吏賊おこゝて黄金峯ゝ兵火やゝて荘厳院の山主てばこゝの僧

侶幽谷ゝ身を潜し門主ハかゝて檜木内と山王ゝ退散さりけれハ聖徳

の太子の神形ハ黒烟ゝ深て玉ゝ魚ゝて林ゝ飛ゝ成ゝ其神

像篁島と地ゝ移ゝ後俗をこゝとさして節木目と云ひゝ今ハ萩の目と

ゝ黄金峯ハ今ゝ明神ノ山獄や荘厳院の未亡と横手の本山

汎の金城山自性院金剛寺是ゝ其後太馬亮光郷この上宮太子

の神像を尊ゝ宗城中ゝ宮殿を造て祭ゝ齋りけゝ

柳崎氏家

柳崎氏姓者滋野井之故越後國柳崎城主長禄三己卯年
ゆゑありて出羽國山辺より来り領主小野寺中務大輔恭道
平庶子部横手城主之 小屬して南部三清光と戦ひ國見駒泣寺小於て
軍功あり柳崎左馬亮光鄰（鄰或作親）應仁戊子年小野寺
家客佐藤式部大輔忠継、及び間を投じて南部を計る其
功を賞して一門道一の居館樋口館を佐藤より恩賜あり于
時柳崎光親より二の柵を分典して是を守らしむ光鄰の子
孫石見光廣天正十五丁亥年最上義光の家藩魁叅典膳光
次と有屋山々血戦して枝群の功あり都べて世々忠戦小
野寺家歴代の功臣名家之小野寺古譜及舊記に著しと見えた

上樋口一村
家員四拾五戸　人員二百五十七人　馬員卅九疋

柳崎氏家

柳崎氏姓者藩野守ニ敢越後国柳崎城主ト[illegible]

ゆかりにて出羽国山寺ヨリ約主[illegible]守大師真[illegible]道

[illegible]して西部ニ清武戦ひ勲[illegible]

軍功あり柳崎大島之丈部御城[illegible]代に十十小野寺

家客佐藤氏[illegible]閉ヶ状[illegible]

功ヲ賞シ[illegible]一門[illegible]

時柳崎光親[illegible]

孫石見守[illegible]天正十五年[illegible]

次案[illegible]四台[illegible]して[illegible]人[illegible]十[illegible]人[illegible]

正直日正林の功臣[illegible]